
おまいら助けてくれないか？ってスレ立ててみた

彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おまいら助けてくれないか？つてスレ立ててみた

【Nコード】

N5131Y

【作者名】

彩

【あらすじ】

『なんか異世界っぽい所に拉致られて帰れないんだけど、おまいら助けて』そう掲示板に書き込まれた事から全てが始まった。暇に任せてそのスレッドに係わった男とそのスレを立てた主婦の異世界拉致物語。勝手に召喚し、失敗作と言われ神殿から追い出された平凡能力なしの主婦（子持ち）が後に召喚されたチートで勇者にされた彼とスレ住人に色々助けられて帰還しようと地味に奮闘する話。短編「おまいら助けてくれないか？」の続編。

短編を読んでいないと全く理解不明ですのでお気を付け下さい。暇

つぶし程度のノリで基本短文でサクサク進めていきたいと思っ
ます。

ネットは無力で有力

ピツ　と音を立てて目の前に出ていたゲームのメニュー画面としか思えないウィンドウを手でかき消すように払い、閉じた。椅子に座ったそのままの姿勢で両手で顔を覆い、うな垂れ、大きい溜め息を一つこぼした。

砂糖なしのカフェオレが飲みたい…。

メニュー画面の隅っこに小さく表示されたGoogleのコメントに気付いたのはついさっきだった。歓喜と興奮で焦る頭でもなんの問題も解決出来ない事が直ぐに導かせられた。

どこに相談する？　警察？　頭がイカれてる狂人扱いで終いだ。こんな非現実的な話をまともに聞いてくれる人なんて「頭がおかしい人」前提で話を聞いて、最後に心の問題や受診を勧めるのがオチだ。

だから、「いつも」遊びにいつていた常駐板に、初めてスレ立てしてみたのがついさっき。

問題解決には至らなくても、抱えた問題を吐きだして返信があるだけで正直嬉しかった。イカれてると思われていてもだ。隠さないと堂々と態度に出された方が自分に起きている現状がイカれてると認識出来て、いっそ心地よかった。

スレを覗いて気付いた日付の衝撃は想像より小さく受け止められた。

ああ、ファンタジーだからなんでもありだろう、そのくらいだった。

スレの雰囲気「いつも」と同じで本当に時間が経っているのか疑いたくもなかったが、同時に検索していた過去の新聞記事閲覧サイトでそれは真実だと判を押された。

ずっと心配だった、咄嗟に突き飛ばしてしまった息子にあの後何もなかったかという懸念は当時の新聞記事に出ていないという事で15%位安堵できた。でも確実ではない。捨てアドでも取って実家や旦那にコンタクトをと考えたがアドレスなんか覚えてるはずない。全部、携帯かPCの中だ。それに取れたとしても相手にされるはずがない。信じてくれたとして、家族まで「狂人」扱いされてしまう可能性が高い。

結局、八方ふさがり…。

私の世界で助けを求める事は絶望的だ。でも唯一の心のバランスを保つツールにはなった。これは確定だ。

もう一度、手をかざし、ピツと音を立ててメニュー画面を開く。私のステータスを示す場所のMPが0になっている。疲れたと思っていたのはMPを消費していたからだだったんだな～と思いながら、私の中でこの世界はゲームだと固定する事に決めた。

女将さんの呼ぶ声を聞きながら休憩を切りあげるべく、私は椅子から立ち上がった。はい、と返事をしながらMPが回復しても、中途半端に会話を切り上げた自分が立てたスレがまだある事を願った。

私が、同じ世界から、同じスレに係わった人が、同じ世界に拉

致された事実を知るまで、あと少し。

ネットは無力で有力（後書き）

ゆるい執筆者なので読み返し等ゆるいです。誤字脱字ありましたら、お知らせ頂けたら幸いです。

主人公にはなれないし、なりたくもない

「召喚の儀式がされたよ」

宿屋の夕食の喧騒が静まった時刻に、疲れきって神殿務めから帰ってきたレッスがプライベートスペースのダイニングテーブルの椅子に腰をかけると同時に発した言葉。

その発言に私の表情筋が固まるのが分かった。

「……ま……た、拉致……ですか……」

「……そうだね。イシードからすれば拉致以外のなんでもないね」

絞りだすようにして掠れた私の声に、レッスが暗い表情のまま苦笑した。目線はお互い合う事はない。レッスは手元に運ばれた夕食に、私は何処ともつかない空虚に。

こんなにも重苦しい空気なのは今度も失敗なのだろうか？ 思案したと同時にそれは杞憂だったとレッスが答えをくれた。

「儀式は成功。無事に救世主たる勇者様を迎える事が出来た……」

ハッ！ 何が勇者だ！ 救世主だ！ 他力本願の快樂主義共め！

！

狂い叫んでしまいたかった。けどもソレを飲み込む。彼はその屑共と同じ神殿に係わる職業だ。神殿兵士。そして私に唯一情けをかけてくれた恩人。そんな彼の前で口に出す言葉ではない。これでも察するという高等スキル保有人種の端くれだ、本当に弁えなくてはいけない時は弁える。レッスは私の無言を受け、齒切れ悪く言葉を続けた。

「…ただ、彼…勇者様が、…………自分の前に女が呼び出されていないか、と」

あまり大きくもない自分の目が見開くのが分かった。頭の中でもしかしたら、もしかしたら！とそれしか繰り返す事が出来ないみたいに連呼する。心が浮き足だしてザワザワして落ち着けない。一刻も早くネットにダイブしたい！確認したいのだ！国が、私の世界が、何かしてくれたのだろうか！？

心ここに在らずな私に彼はまだ言葉を続けた。
それはもう眩きに近い位の声音で。

「聖統括様は、その問いに、否、と、答えた」

この部屋の空間が止まった。いや、私と彼の空気が止まったんだろっか。

低学歴m9（＾Д＾）プギヤーと罵られた自分でもわかる。学問と人生経験は別だ。私は失敗作で、その存在を（何故か知っていた？）勇者様が訪ねた。屑野郎（聖統括）は存在を否定した。

導かせられるのは、私の存在は不要。即ち、死、だ。

「神殿はイシーダが生きてる事は薄いと考えている様子だけれど、可能性を0にする為に近日中に搜索隊がつくられる」

ああ、目まぐるしく思考が流れる。体は動かないのに生存本能が死の恐怖に対して生き残れる可能性、行動を模索し始めている。これはゲームでいえばイベントなんだろうか？ 逃走イベント？

「…夜が明け次第、ここを、出て…いきますね」

これしか選択肢がない。残ったままではバッドエンドだ。善意で助けてくれたLESSや家族のように接してくれた女将さん、ぶっきらぼうで、でも優しく頭をいつも撫でてくれた旦那さん。この家族に迷惑をかけられない、いや、かけてはいけない。

本音は、どうしたらいい、助けてと、縋りたい。他人任せにして甘えてしまいたい！ 私は強くはない！ 逃げ出して自分の殻に閉じこもりたい！

それじゃあ、あのクソで屑共と同じ。それだけはまっぴらごめんだ！！

やる事が沢山出来てしまった。自分にあてがわれた部屋に向かう為に後にしたドア越しにLESSが何か呟いたのが微かに耳に届いが、小さすぎて私には聞き取れなかった。

自室に戻って外出用の上着と給金として貰っていたお金（お世話になってからと断ったがお小遣いと言われて押し切られた）をありったけ持ち出した。この世界は娯楽が少なすぎるので無駄使いは殆どしていない。甘い物くらいしか私には楽しみがないのが悲しい。

女将さんを探してピークの過ぎた受付フロントは寛いで談笑するお客さんがちらほらいる位で私が少し出ても平気そうで安心した。道具屋に行くと言えれば、朗らかに笑って「気を付けて行くんだよ」と送り出してくれた。

そのセリフと言いように実家の母が重なった。まったく同じ言葉をいつも出かける時にかけられるのだ、20を過ぎて嫁いでもなお、

その言葉をくれた。

返事をして裏口から出た。私は我慢できずに口を押さえても少しこぼれる声を必死に抑える。

いつか、大声で泣ける場所に私は、還れるのだろうか？

主人公にはなれないし、なりたくもない（後書き）

イシード呼びに突っ込み描写を入れたかったんですが折角シリアスっぽいので自重。基本おちゃらけた思考なのでそのうち爆発しそう。

私は日本人だ

小走りで足を進めて、目的の店に急ぐ。案外早く着けば、日が沈みかけているので、道具屋も店じまいの準備をしていた。closeの札などお構いなしに扉を開けて顔馴染み特権で色々買う事が出来た。出掛けるのかと聞いてきたから親戚が危篤と社会人の常套句を述べてみた。実際、私の世界では40年経っているらしいので親戚はバンバン鬼籍に入っているだろう。泣いたと丸わりの顔だし丁度いい。後何回でも言える台詞だなと考えて、自分の両親については意識しない様、思考から目を背けた。

只今戻りましたと言いながら宿屋の裏口を開ければ、中が見えないと感じたと同時に、凄い勢いで身体を絞めつけられた。私より大きくて、柔らかい、温かい温度が身体中に伝わる。私はこの感覚に酷似しているモノを知っている。無条件で張り詰めていたものが緩んで泣いてしまいそうだった。必死に耐えようとしたら頭に何かがポツポツと落ちてくる。背中に回っていた温もりが移動して、私の髪を優しく撫でる動きに変わる。

「なんで、あんたばかり、こんな目に、合っちゃうんだろうね。ごめんよ、ごめんよ」

女将さんの掠れて水っぱい声が頭上から顔の前から響いた。

その瞬間、もう耐えられなかった。少しだけ、少しだけ、甘えていいだろうか？ 誰かに許可を取るわけではないが言い訳まがいなことを思いながら、私に温もりを与えてくれている女将さんに腕を回してしがみついた。まるで幼子が母親に抱きつくみたいに。喚いてしまいそうになる声を抑えて、うーうーと呻くみたいな声を出し

て。子供の頃に帰ったみたいは何度もお母さんお母さん！ と心の中で叫んだ。

私と女将さんが少し落ち着いた頃に旦那さんがいつもの様に頭をポンポン撫でながらダイニングテーブルの椅子に促してくれる。目を向ければすでにレッズが座っていて、旦那さんに支えられた女将さんが腰を下ろそうとしている所だ。

私が出ている間にレッズが二人に話したのかと泣いた直後でぼんやりする頭で思った。

「まだ子供と言ってもいいシーダを、なんで、なんで、酷い仕打ちばかりっ！！」

「女将さん。いつも言ってますが私、29といい歳なん」

「ああ、シーダ！ 無理してまでこんな時まで冗談を言わなくてもいいんだよ！」

ぼんやりしていて、思った事をそのまま口に出してしまったものの、いつものように信じてもらえなかった。言い切らせてもくれないう寂しさよ。多分、行動からすると旦那さんも私の年齢を冗談だと思っているだろう。少し恨めしい民族性だ。

ああこんな優しい子がっ！と隣の旦那さんの胸に埋もれて女将さんが泣きだして、旦那さんは悲しそうに女将さんの頭を撫でている。それを正直、羨ましいと感じた。

それから落ち着いた女将さんや旦那さん、空気になっていたレッズと「これから」について話し詰めた。はつきりいつて此処を追い出されたら行く当て等ないわが身。だから女将さんから提案された隣街の知り合いの宿屋での仕事口は正直助かった。手紙を書いたからこれを渡しなさいと差し出された手紙を受け取った所で空気だっ

たレッスが口を開いた。

「俺も一緒にいくよ、イシード。まだ子供のような君を一人で行かせるのは心配だ」

お前もか！ 彼にはきちんと自己紹介をしていたのにもかかわらず！！

この世界の人々は私が29歳で子供を生んでいるという事実を認識する事が出来ないのだろうか？！

「いえ、大丈夫です」

名案だとばかりに頷き始めた女将夫婦に釘を刺すように即刻、ご遠慮申し上げた。レッスが僅かに眉を歪めたが彼が口を挟む前に提案を論破しなくていけない。

搜索隊を組む事が決まった後での前もって知らせていた訳でもない休暇、失敗の召喚に係わっていた兵士、しかも神殿から追い出した兵士だ。私の顔を知っている可能性の高い彼が搜索隊に組まれなわけがない。少しでも不審に繋がる可能性を作る事はできない。そこからこの家族になんかしらの災厄が降りかかる事は絶対に避けたい事態だ。

少しだけある本音は、そろそろ地を出してしまいたい、というのもある。

私の態度は対人仕様だ。いくら家族の様に接してもらっているといても恩人に礼儀を欠くことは出来ない。だから違う街では少しは「私」を出したいと思った。

本音を隠してこんこんと真つ当な事を述べ、心配してくれている

恩人を説き伏せていく。

そして夜が明けた。

一睡もしないまま。

私は日本人だ（後書き）

イシーダは地味に突っ込んでみた。

ミス！相手に突っ込みは効かなかった。

完徹の訳

もうね、三十路近い女には貫徹とか無理。若い頃はハイになって騒いで爆睡すればよかったんだけどこの歳になると気分はローな感じ。車の運転で言えば5速発進しちゃっていつまでも半クラのままでガタガタする感じ。ああすまん、今はオートマ限定が主流らしいね、すまんかったおばちゃんが悪かった。元氣の前借したいから誰か栄養ドリンクをくれ！！

恩人を説き伏せた後、直ぐに自室に戻ってお出掛けの準備を完了させ、焦る心をそのままに乱雑にメニュー画面を開いた。MPが回復してるのを確認して、Gにダイブした。

感想をいえば、チョコが非常に食べたい。特に一口チョコ。白と黒の二層のやつ。

まず、時間の流れが速いはずの私の世界。なのにこつちと時間経過が今は変わらない。

その証拠にスレがまだ残っていたのだ。正確に言えばpart3になっていただけ。私が抜けてからの流れを読み返すのに没頭した。通常だったらマジキチ扱いの書込み、でも今の私には惹かれて止まない。

『なんか異世界っぽい所に召喚されたんだけど、おまいら助けて』

その書込みの後しばらく沈黙していたが、数時間したら怒涛の流れが開始した。

読み進めれば進むほど私がLESSから聞いた勇者様と当てはまる。

そしてこの召喚された彼は何度も、何度も、私を呼んでいた。

『おい！<<1！！！！スレ見てくれよ！！！！！！！！！！！！！！！！お前ここにいんだろ？！！本当はいるんだよな？？？！！いるっていつてくれ！！！！！！』

悲痛な叫びとしかいえない彼の書込みは続いていた。私とは違う世界という可能性を否定したくて、したくて。私は知らずに泣いていた。深夜テンションパネエとか強がって目元を拭う。とても不純な涙だ、彼は絶望や孤独、不安に陥っているのに私は、嬉しくて、一人じゃないと安堵して、泣いたのだ。仲間が来た、と。日本から、常駐スレから、同じ境遇の。

『おい勇者様wwよくも聖統括の屑野郎に自分の前に女が呼び出されていなかったきやがったな。あの屑、否って言っただろ！喜べ、おかげで私は消される事になったぞ』

軽い冗談みたいに書込む。こうする事で私は「いつも」を取り戻せる。内容はヘビーだけど。

<<1 キ・キ・キ・キタ (。°。°) !!!!!

<<勇者！！勇者ああああああ！！！！起きろ！起きるんだ勇者！！！！！！

勇者！！！！何してんだ！てか<<1！！！！どうしたんだ！k w s k ! k w s k - - - - - !

おお！ まさかキタ (。°。°) ! が自分にカキコされる日が来るとは思っていなかった。地味に嬉しい、テンション上がる。k w s kの文字に窓に目を向ける。空は少し薄くなってきた、朝

は近い。

『ごめん。夜が明け次第、逃亡イベント開始するからもうあんま時間ない。落ち着いたらk w s kに答えるよ。あと勇者様w w私の事を口にも態度にも出すなw w w私に死亡フラグ立ちまくるからw w w あ、質問に答えよう、同じ世界にようこそ、勇者様』

書込み完了と同時にもう流れは見ないで、手を振った。ピツと音を聞いて、ゆっくりと長く息を吐きだした。さあ、始めようか。

小さいノックの音の後にレッスの声が私を呼んだ。荷物を背負って扉に手をかけ、開けた。

明けない夜はない。

完徹の訳（後書き）

もつと簡潔に進めたい。書いてからちよつと蛇足な話だったなと後悔。・・・勿体無い精神は大事だよな。

もしかして完徹って言葉はメジャーじゃないのかしら...？

徹夜明けはおかしいと言う事に気付かない

草原。平野。広大な世界。明るくなっていく空。ゲームでは心躍る初めてのフィールド。

そう、冒険の始まりだ。馬車なども通るのだろうか広く歩きやすい道で足を動かす。

『この道をまっすぐ行けばマシエドの街に着くからね』

隣街の名前。そんな名前だったのか。歩みを止め、今までお世話になっていた宿屋のある街？ 国？ に振り返る。

そういえば此処はなんて名前だったんだろう。

LESSに説明されたはずなんだけど、全くと言っていいほど覚える気すらなかった。恨みこそすれ、愛着など到底湧かない。女将さん達がいる、その為だけにマシエドの街に着いたら少しだけ調べてみよう。それだけ考えてまた前を向いて歩きだす。

大人の足で昼位には着く近さらしい。らしいという表現なのは私は大人だが、この世界の大人とは体格が違う。散々子供扱いされるのもそのせいだ。奴らは揃って西洋体型、といえはいいのだろうか？ コンパスがまるで違うのである。自分の身長から割り出してみたら、女将さんは170？ 近く、旦那さんは女将さんから10？ 位高い。LESSなど旦那さんより明らかに高かった。それに比べて160？ に満たない自分である。

やめて！ 私の首はもう瀕死よ！ 何度声無く叫んだ事か……。

「一般人がみんなスタイル抜群、おまけに美形とかどんだけチー

トなんだ」

早速、最近覚えた単語を使い、ブツブツ呟きながら手に持つ棒を振り回した。

棒。宿屋から出る時に女将さんから渡された警棒みたいな真つ直ぐな一本の棒。

変な人や魔物が近付いてきたらこれで追い払いなさい、と女将さん愛用だという棒。握りの部分に布が巻かれた（使いこまれた痕跡有）、先端が丸く加工された打撃専用の棒。

どこからどう見ても、ひのきの棒です。本当にありがとうございます。

初武器がデューキュー5主人公初期装備とか、どんだけ。ありがとうございます、たぎります。

歩きながらメニュー画面を開けば、装備項目に激しく悶えた。

E ひのきの棒

E 布の服

にやにやが止まらないのは徹夜テンションのせいである。そう納得させた。

歩けど道。道。お天道様が天辺にいらっしやるのに街のまの字も現れない。木がちらほら生えていて少し先に林が見える位には風景は変化したのに。このままでは不味い。暗くなるのだけは頂けない。松明とか無いし。

こつちの世界に来てから半年近く、絶賛アナログ生活していたので体力は前より上がったと信じてペースアップの為、田舎で歩く速度から東京駅での歩行速度に切り換える。

…暇だ。

せかせか動かす足を余所に上はとても暇だ。

ここの世界に来てからゆつくりと考える事を放棄していた。生活の為と身体を動かして、くたくたになるまで宿屋を手伝い爆睡、を繰り返していただけ。還りたいと願うだけで手段さえ考えないで。暇に任せて少しだけ思案してみる。

屑共は救世主（勇者様）を欲しがって拉致をしていた。（過去形。勇者拉致成功させてるし）

魔王うんたらいつていたけど、宿屋にいた時に魔王とか魔物がとか私は聞いた事が無かった。テンプレじゃ、

魔王誕生↓魔物超元気なる↓人が襲われる　↑イマココ

ではないんだろうか？

昨日のお客さん達だつて、疲れたとか腹減ったとか明るかった。ぶっちゃけ、これで幾多の魔物を屠った…的な使いこまれた武器とか見た事ないし。

現に今だつて、一度も魔物なんて現れていない。

丸くて青い、ぴょんぴょん跳ねる魔物に会うのを少し期待していた私のやるせなさ。諦められなくて周りをキョロキョロ、道いなし、

平原いなし、林いな……

…い、や、え？　なんかいた。

黒くて、遠目に見ても……その、…すごく、おつきいです。

そうですね。別にゲーム的始まりの町に居た訳じゃないですしね？　だからってだからって、これは反則じゃないですかね？

どう見てもドラゴンです。ありがとうございました。

走って逃げろと思うのに、好奇心に負けた。

向こうは気付いて無いのをいいことに、しばし、ガン見。視姦レベルでガン見。

一言で表すならファイファン5のバハムート、としか表せられない己の表現知識の無さよ。

「やばい。バハムートかつこいい、マジかつこいい」

思った事を素直にすんなり出してしまう自分を残念な人だと、今更感じる。

その声に反応してしまわれたのかバハムートさんの首がぐるんと動き、まんまドラゴンな顔が私に向いた。

（。・A・。）　コッチミンナ

コレだ！　私の心情を表すのに最も適した顔文字が浮かんた。細部などよく見えないくらい遠い位置なのにバッチリ目が合った気がする。

なんという事でしょう。バハムートさんがゆっくり動き出しまし

た。なんていう死亡旗！　これはもうあれしかない。今、アレをしないでする。

「わっ私なんか食べても美味しくないですよー！ー！！！」

逃走。最初どもったけど何とか捨て台詞も吐けた。逃げるが現実的判断です。道をダッシュで駆けて、息が苦しくなった時にちらりと振り返れば特に何も追ってきていない。

無事、逃げるは成功した。けど、そのまま私は走り続ける。

初エンカウント……、怖かった。

手が嫌な感じにベトつくのを感じながら、やっと小さく見えてきた街に少し安堵し、振り払えない恐怖をそのままに街の入り口を越えるまで私は足を止められなかった。

ボサボサで汗で顔にへばり付く髪、着崩れている服。命からがら逃げてきた様な格好を直さず、荒い息のまま宿屋を探す自分を思い出して、夜ベットの上でゴロゴロ暴れるはめになるのは、閑話休題。

知らない宿屋の扉をくぐり、今からやつと「私」として在る事が出来ると徹夜明け&恐慌状態の最悪なコンディションで考えた名言に一人はしゃいだ。

まともな状態になってから思い返して、数十年単位で開く事の無かった黒歴史ノートにその迷言をそつと封印し。私の初イベント、逃走イベントが終了した。

徹夜なんてもつするもんか。そつ心に決めて。

徹夜明けはおかしいと言う事に気付かない（後書き）

デイーキュー

ドラクエ
DQ

ファイファン

エフエフ
FF

上記の表現は仕様でございます。

シリアスさんはログアウトしました。

そんな訳で徹夜明けでおいしいテンションに気付かないままなイシ
ーダでお送りしました。

おかしいことにさえ、体が辛いことにさえ、年取ると気付かなくな
る。そんな名言を聞いて最近実感しました。

本名が出て来ませんが彼女は石田弥生さんイシダ ヤヨイです。こちらの世界では
石田としか名乗ってません。（無駄情報）イシーダの本当の発音は
イシイーダ。打ち込みが面倒とか思ってたせごめんなさい思っ
てます。

年齢詐称したくてするんじゃない（前書き）

一部、下品な表現があります。

苦手な方は回避して下さい。所詮、下ネタというやつです。

年齢詐称したくてするんじゃない

ああ！ 地をだせるって素晴らしい！！

女将さんに紹介状を貰って新しい職場に無事ありつけてから、ひと月。新たなサイクルになった生活にすっかり馴染んだ。男として脂の乗った40代と思われる宿屋のご主人、諦めていた時に出来た二人目を絶賛妊娠中の奥さん。よく言う二人目不妊ですね、分かります。そして宿屋後継ぎの14歳の息子さん。

「イシードー！！ 何サボってたんだ、テメー！」

訂正。14歳のクソ餓鬼。

「何処をどう見たらサボってる様に見えるの？ 目悪いの？ 頭腐ってるの？ 死ぬの？」

てゆうか死ぬ。この一言を言わないのは私が大人だからだ。張ってある紐に洗濯物をせっせと干して行ってる私に何たる暴言。

「手がおせーんだよ！ チンタラやってサボってんじゃないやねえよ！！」

「それでも私は最大速度だ！ 効率を上げる為の環境改善を再三にも要求しているのに一向に改善が認められない現状に異議申し立てをする！！ そしてそんな私に対しての暴言に謝罪を要求します、バイス坊ちゃん！」

「かんきょ…？ つーか、坊ちゃんて呼ぶな！！！！」

はっはっはっ！ 負け犬の遠吠えほど爽快なものはない！！ 見

たまえ、少し小難しい物言いをすれば理解出来ていない、その顔を！ 止めに、思春期真っ只中の少年に対して坊ちゃんという羞恥を誘う敬称！ まるで熟れたトマトの様な赤面ではないか！ 愉快爽快。

その様に満足し、バイス坊ちゃんは華麗にスルーして私はまた洗濯物を干し始める。

確かに洗濯干し作業が遅いのは私も自覚している。宿屋裏にある家人用の庭に張られた何本もの紐。それにシーツや服を掛けたり通したり、の簡単なお仕事です。ええ、簡単ですよ。

身長があればね！！ 特にシーツを引つ掛けるのとか死ぬる！ つま先立ちし過ぎて足つつた事は数知れず。うう、女将さんの時は直ぐに改善してくれたのに……旦那さんが。

「テメーのせいで俺が手伝う羽目になったじゃねーか。ステー達と出掛けるはずだったのによー」

文句を言いながら隣に立つバイス坊ちゃん。ぱつと見、クソ餓鬼なのに親の言いつけは守る、弁えた少年だ。だがしかし。

「そう言うなら今すぐ紐の位置を低くしてよ、バイス坊ちゃん」

このガキ、私より身長が高いのである。ぶっちゃけ近くにいた時は見上げなくていけない。高身長とか滅びればいいのに。

「ハッ！ ヤなこつた！！ お前が早く大きくなればいいだけだろ！」

「無理。私の成長期はとっくに過ぎました。ええ、とっくの昔にね」

大事なことなので二回言いました。私があと大きくなれても人はそれを肥満と言う。

「まだ１９とか嘘通すつもりか？ ガキみたいな事いつてっからガキのままなんだよ」

くっだんねーと今にも聞こえて来そうな位のハイレベルな顔芸を披露してくれるバイス坊ちゃん。泣く泣く妥協して伝える決心をした１０歳サバ読みの私の年齢さえ信じてもらえないこの侘しさ！
今こそ昔取った二つ名スキル発動の瞬間だ！

「出るところ出なかっただけで生えるところにはもっさり生えてるの
で大丈夫です。まだ生え揃ってもない少年にガキ扱いされたくないね」

「おっ、ま！！！」

秘技、「おっさん殺し」 ただの下ネタです。ありがとうござ
いました。

女が言う事により破壊力無限大。数多の空気を破壊しつくして、
おっさん達を居た堪れなくさせた、「ぶっ壊しの石田」と讃えられ
た私の二つ名。

その対象はおっさんだけではない。

顔を真っ赤にして私を凝視したまま固まったバイス坊ちゃんを完
全スルーし、カラになった洗濯籠を持ってその場を後にした。

見事、バイス坊ちゃんの何かをぶっ壊す事に成功したようだ。そ
れが私への印象だとしても構うもんか。１９歳と名乗るだけでも背
筋がぞわぞわするというのに、それさえ信じてもらえないなんて泣

きたいくらいだ。

そんなこんなで素で居られる解放感を満喫。うん、平和だ。

背後から「テメー！！ 女のくせになんて事言いやがんだ」等と聞こえ続ける言葉は私にとって、くあwせdrftgyふじこ1p、と心地いい響きにしか聞こえない。

あー、子供ってとっても可愛いね。

年齢詐称したくとするんじゃない（後書き）

あれ位のものでR15をキーワードに入れた方がいいのでしょうか・・・悩む。

そしてシリアスさんが行方不明の件について。戻ってきて！

私はモブキャラとしか言いようがない絶望

平和です。

このまま平凡にこちらで第二の人生を初めてしまえと囁く心もある。

容姿が若く見られるのだから年齢を偽ったまま伴侶を得てここで生きる。独り身には嬉しい世界だ。ここの世界は誰だろうが整った顔をして、大体の人は心根の優しい穏やかな人々で溢れているのだから。でも私は鏡を見る度に思う。

ここは私の居場所じゃない。

化粧や、ましてスキンケアなんてしていない自分の顔。違和感。毎日接する人々の顔に慣れて、それが日常になっている。そして夜、寝支度をするたびに鏡に映る自分にいつも助けられる。

自分の顔が自分では分からない事に胡坐をかいて逃げるな、と。

今日の仕事の終わりの伺いと共にご主人や奥さんに挨拶をして自室へ。最後の寝支度の寝巻に着替え、すぐベットに潜り込む。枕を顎の下固定し、手を振って画面を呼び出す。そして日課として定着したネットにダイブ。

行く所は一つ、まとめサイトだ。奇特な協力者のおかげで掲示板から独立し、流れに怯えるという不安はなくなった。何か有用な書

込みがされてないか目を通してから、自分のインを伝える。

『お疲れー、仕事終わったけど勇者様wは今日はこないのかねえ？』

勇者様wは、私が少し落ち着いてkws kの為にスレに行った時に初接触して以来、一日も欠かすことなくスレに顔を出している。まとめに移動してもそれは続いている。生活リズムの違いでほぼ確実に彼の方が先に来ているのがつねだ。

その彼が、まだ、来ていない。

嫌な予感が私を支配しようとしている。彼は拉致されてから直ぐに国王と対面というテンプレ展開をしたらしい。魔王ww討伐の条件に帰還を約束させ、下準備期間に入っていると言っていた。生活、情勢、世界、まずはここで生きる為の一般の事を。慣れてきたら戦闘に対しての本格準備が始まるという予想は彼や私、スレ住人一致の見解だ。

『ただいま、諸君。少し遅れてしまったようだね』

何度目かの更新で、キャラ作りして勇者様wがインしてきたのを確認して、ほっと気を緩めた。彼は決まってここに来る時に「ただいま」と発言する。彼もまた、この世界での存在を認めていない。その意思表示だろうか？ その事について私は一切問わない。

ただ、かならず皆で「おかえり」と返事をするだけだ。

『おかえり』

そう書込むとリアルで会った事もない彼がへにやりと気を抜いた笑顔で喜んでいる顔が、見えたような気がした。

『あんがと。ただ良いか悪いか分からんけど、勇者www拉致のお披露目wwwが決まったwwwなにこれ死ねるwww』

彼のこの書込みは、日常の変化を私に覚悟させるには、十分。良くも悪くも動く時が来た。

でもふと思ったけど、私なにすればいいんだろ？

てか何か役に立てるの？

まさしく完璧といえる最強チート能力多数完備の勇者に。

そんな自分の平凡さに少し泣いてもいいだろうか？

私はモブキャラとしか言いようがない絶望（後書き）

全年齢向けという事であえて変換していない漢字が多数あります。

読みづらい、文章の雰囲気が無くなる等思われる方がいましたら、お詫び申します。

雰囲気とか自分の文読み返してからいえm9（＾Д＾）プギヤー
と思つて下されば幸いです。

シリアスさんが一時帰宅を果たしました！やったね！

転職はダー。神殿で

結果だけを言えば。

私は待機命令を出された。

うん。そうだね。お披露目があるからつてすぐに魔王ww討伐に行くわけじゃないですもんね。まとめ議会が勃発して、決まった行動方向は勇者様wwは暫くの修行メイン。同時に内情や有力になりそうな情報収集。

かたや私は特に何もなし。その結論が早々に決定されてからのスレでの私の居た堪れなさといったら……くう、泣ける。

そんな訳で私は街と隣接している林に来ている。

え？ 何故つて？ ゲームといえばレベルアップでしょう！！さすがにLv1のまま甘んじているほど私はゲーマーとして落ちぶれていません！ 心外な。初エンカウトで超ビビったのは昔の話しさ。

「よっしゃ！ 私のひのきの棒の威力を見せてやるっ！」

あれから地味に情報収集をすると、どうやらこの辺りのモンスターは比較的穏やかの上、遭遇しても子供でもどうにかなるらしい。確証はありますよ？

「ビビって腰引ける奴がほざいてんじゃねーよ、クソ女」

隣にいるバイス様がそう仰ってありました。もうあの下ネタ事件からバイス様が見る目はとてもお変りになりました。きちんと詐称年齢通りに認識して下さったみたいです。

まあそれでも直ぐには信じて下さりませんでした。入浴中に突撃してみたりと少し大人気なく意地になっておりましたら無事、信じて頂きました。子供産んで29にもなりや恥じらいなんてとつくに捨ててるよ、私はな！！間違えるなよ！他の圧倒的多数ママさん達は違うというのを前提してね！！

「オイ！！なにぬるい目で俺を見てんだよ！！外にいんだから少しはシャキつとしろ！」

「ああ、すまないね。もの思いに耽ってしまったよ、おばちゃん」
「おばちゃんて…お前、俺と5才しか違わねーだろ」

その言葉に私は最大限の生ぬるい視線で答えておく。知らぬが仏、ってね。

「…もういい。すこし奥にいくぞ」

そう言っただけバイス様は木刀で塞がっていない左手で私の右手を握って、若干引きずる様に足早に進む。

遠い昔のように感じる右手の温もり。バイスには悪いがこの温かみを通して私は、バイスよりもとても小さく、柔らかい手の平に思いを馳せた。

出掛ける時いつも、ずっと繋いでいた、小さな愛しい手。

暖かく愛しい、切ない感傷。それも束の間、私は棒を振る。

無慈悲に棒を振る。機械的に棒を振る。容赦なく棒を振る。

珈琲が飲めない鬱憤を込めて棒を振る。醤油が無い怒りを込めて棒を振る。

米が食べれないフラストレーションをぶつける様に棒を振る。

打撲打撲打撲打撲打撲打撲打撲打撲打撲打撲。

撲殺撲殺撲殺撲殺撲殺撲殺撲殺撲殺撲殺撲殺。

「ははっあはははははは！ ほくら、豚の様な悲鳴を上げて私を喜ばせろ！！」

笑いながらも私のひのきの棒は止まらない。打ちすえているグミみたいな感触でサッカーボール大のデロデロしてるモノがスライムとは私は認めぬ！！ 隣でドン引いてるバイス様。これが正しいドン引きのリアクションです、と見本の様な体勢でドン引いてるけど全く気にしない！！

日本人のストレス蓄積量をなめるなああああ！！ 簡単にストレスを感じ、かつ、膨大に溜めれるんだぞ！！ うおおおおおおおお！！！！

私のストレス発散法が確定しました。

ドン引きから立ち直ったバイス様が私を羽交い絞めにして止めるまで、私のストレス発散打撲は続きました、まる。

初勝利を果たし、やけに疲れた顔をしたバイス様とは裏腹に、私はスッキリサッパリとした心地で足取り軽く帰路についた。

嬉々として自室でメニュー画面を開いた私がリアルO r zの姿勢になるとは、その時の私は思いもなかった。

あんなにスライム（仮）倒したのになんで……………

1レベルさえも上がってないの?!

職業お母さんの困難さにゲーム神殿に駆け込みたくなった瞬間だった。

転職はダー。○神殿で（後書き）

ダーマ神殿〓転職する施設。DQに度々登場する。

シリアスさんが途中ログアウトした模様です。

それにしてもキャラに輝きがない地味な物語である。

モブキャラ同士の絡みしかないとかどんだけ平凡なんだろう……。勇者様のターンを待ち望もう……。あるのか……。？

閑話 熱く滾る情熱を（前書き）

只の馬鹿話です。

閑話 熱く滾る情熱を

スライム（仮）いっぱい倒したのに1レベルも上がらなかった！
絶望した！！！！

この悲しみを伝えたくて、早速スレで吐きだしたら猛攻された。

休憩時間に覗いていたらしい勇者様にさえ攻撃された。攻撃という名のお叱りの嵐。

心配からくる厳しい言葉と分かるので甘んじて受けた。罰として胸のサイズを晒せ！ の発言は何故か勇者様だった。……………子持ちおばはんの胸とかどんだけマニアックなんだい、君。

[illegible]

勇者様の熱いパトスは十分に受け取った。

「だが断る！！」

受け取るが拒否する。女性にとつて貧乳とは恥ずべくするものであつて、決して誇れるものではない！！！！！！ 絶つつつつ対にだあああああ！！！！！！！！

『ふつぎけんな！！　　＜＜１！！！！　　オメーに拒否権なんざねええええええ！！　　もう耐えられないんだ！！！！　　肉眼で拝めないな』

ねえ、それより私の職業お母さんについての議論は？ 最初からスルーされてるんですがががが。

男の子のおっぱいに対する情熱を嫌というほど実感した。

女の子は男の子のちん。にそれほど情熱は持っていないというのに……。

性別の溝は谷より深いんですね。

閑話 熱く滾る情熱を（後書き）

サクサク進展を誠にしなくては・・・！

私は私でありたい

あれから私はモンスター狩りをやめた。スレの皆が心配からの反対意見が圧倒的だったのと、私自身の鬱憤を晴らすために弱者の命を奪う事への罪悪感からだ。もう無邪気に蝶の羽を筆る幼子ではない。

もう一人の自分を演じる……違う、演じさせられる。

古いゲームにあったな……。もう一人の自分という仮面をつける。周りが私に子供という仮面を付け様とするから私はあえて仮面を付けた。19歳という仮面を自分で選んで。

なのに実際は選んだ仮面がいつの間にか周りが望む仮面にすり替わってる。

周りに合わせる。日本では極当たり前の処世術だ。それは協調性を生む。慣れたそれなのに今は辛く、怒りさえ感じはじめている私がいる。

だって本当の私を誰も認めない！ 存在を許さない！
29歳という女を！ 人の妻だという事実を！ 一児の母という私を！！

少しだけ勇者な彼を羨ましく思った。こんな考えを言ったら彼は怒りだしそうだ、「俺だって同じだ、連中は俺の勇者っていう肩書だけを見てる」容易に想像はつくけれどそれでもいいじゃないかなと思ってしまう。

だって彼には力があるんだから。

日中の休憩時間を自室で過ごす中、開いていたステータス画面を見ながらそんな思想に耽る。目の前に浮かぶジョブを表す「お母さん」の文字。それだけが今のあやふやながらも私を確立出来る唯一の証明。

自己確認を終わらせ部屋を出る。挿げ替えられた仮面ではなく自分の意思で選んだ仮面を付けて。二階の奥に設けられた自室から家人の居住区の扉を開く。テーブルの席に初めて来た時より大きくなっただけのお腹を抱える奥さんが居た。私に顔を向け、視線が絡むとニコリと笑って口を開いた。

「イシダ。近々、貴女に来客があるわ」

「……来客…ですか…？」

「ええ。宿商会経由でブランフォードの女将さんから手紙が届いたの」

一瞬の戸惑いと軽い混乱をすぐに奥さんは正常に戻してくれた。ついでに女将さん達がいる所はたしかそんな名前であつたはずだ。マシエドの街に来てから調べてみたはいいものの、すっかり今の今まで忘れてた。すみません。

「嬉しいです。いつ頃の予定なんですか？」

私は嬉しそうに笑みの形を張り付けて奥さんに尋ねる。

「勇者様のご出立の後つてあるわ。LESSが来るらしいから私も会えるのが楽しみなの、あの鼻垂れ坊主が今じゃ神殿兵なんて！ 沢山からかつてやるつもりよ」

茶目つ気たつぷりに微笑む奥さんに「それは是非拝見させてもらわなくちゃ」と相槌を打つ。ひとしきり雑談を交わし、干した洗濯物を回収に向かった。頭の中ではLESSが来る「意味」に考えを巡らせて。

調子はどうだい？　なんて軽口を交わす為に来る、なんてはずない。

いい知らせか、悪い知らせ……後者の可能性が高いよね…。

時期が勇者出立の後。これは何か関係があるのか？　甘い考えをすれば召喚失敗者の搜索終了、とか？　勇者が旅立ってしまったえば追求する者なんかいないし。搜索隊解散でLESSも自由がきく様になつて、……筋は通る。

いや、樂觀視はいけない。

洗濯物を手早く回収しながら私は、一日の仕事が早く終わる事を初めて願った。何故だかこの案件を早急に皆に知らせたい焦りを抱えて。

私の屋内に戻る足取りは知らずに小走りになっていた。

ネットの酸いと甘い

待ち望んだ仕事の終わりは随分と時間がかかった。勇者出立を一週間後に控えてるせい、生勇者を一目見ようとする人で隣街であるマシエドも徐々に人で溢れてきている。そうなると必然的に宿泊客が増え、私の仕事も多く。

「出立が終われば少し休む時間を作ろう」そうご主人が労いの言葉をかけ、本日の労働が終了した。真つ暗な空を見上げて、地球よりあきらかに大きい月がいつもより上にきている。心配性な勇者が「何かあったのかも？何かあったのかも！！」俺ちよつとマシエドまで行ってくる！！！」等と暴走してなければいいなと考えながら身支度を済まし、自室に向かった。

彼は極度に「独り」を恐怖している。

私だつて怖い。だけれど「一人目と二人目」では怖さが違う。

独りだった者が同胞を得て無くし、また独りになる恐怖。

独りを知らぬ者が同胞を無くし、初めて独りになる恐怖。

絶望を知っているかいないかではソレに対しての恐怖は余程のものだろうな、と思う。私は絶望から全てが始まったから彼より少しだけ、冷静になっているのかもしれない。

ベットに潜り、いつもの体勢でログイン。正直な感想を言っている？

『落ち着け！！！！ 勇者様 W W W W！！！！！！ お前の出立で

仕事忙しいからイン遅れるっていつてあつたでしょーが！！！！
メッ！！」

この書込みがまんま感想です。スレの皆が最初はなだめていたけどネガティブ思考全開勇者に疲れたのか悪ノリし出して脱走はデメリットが大きいやら、じゃあ城から<<1にアピールしてみるやら、マシエドに魔法ぶち込んでみる等、もはや力オスだ。

やめろ、私を殺したいのか？

そのくせ私がインを知らせれば『おかえり』『おつ』『お疲れさーん』とか、めちやくちゃ普通にしてる。……お前らのノリ替えのよさがいつそ、愛しい！

昼間、悶々としていた事すら吹き飛ぶ。この場所が、この交流があるから私は狂わずに、見失わずに済んでる。特に今日の様な日は実感はひとしおだ。皆への感謝を心の中で呟き、優しく溶けていった。

ネガティブ勇者が落ち着いてから私は本日発生した懸念案件を早速投下した。途端に変わる空気が心地いい。真面目な人、やる気のない人、ふざけてる人、態度に変化がないのにそれぞれの話しの中心には案件がある。一つの結果を求めない話し合いではとても素晴らしい議論方式なような気がする。私の楽観的予想もとおりあえず述べておいた。

<<1 甘すぎる

<<1 そんなに旨いこたあいったら人生楽チンコ

<<1 もう少し危機感を持って<<1
<<1 そうだといいねホジホジ（σ、）ポイ（、
>、）σ。
<<1 それだ！
<<1 お前ら楽観的と書いてあるだくあwせdrftgひゅじ
こ1;p@:

なんていうか、ごめんなさい？ 場を乱しただけだったOrz

また結果だけ述べよう。

うん。なんか私、軽視されてね？ おばちゃんなんだか疎外感を
すこし感じちゃうな。

<<1 神殿兵なんだろ？そいつがなんか情報持ってくるのは確
実だろ

<<1 まあなんだ、いつでも逃げれる様に荷物はまとめとけ
<<1 それでF A

これでも一番生死の危機が身近な人なんですがががが。

寂しさは覚えるけど仕方ない。うん、仕方ない。

繰り返し自分で自分を慰める侘しさよ。

戦うコマンドが選べない私は「逃げる」の一択しかないのも自覚
している。

ベットから降りて夜中にモソモソ荷物を即まとめ始める私は重々
にその言葉を受け止めているからだ。決して不貞腐れているからで
はない。

『マシエド立ち寄った時にチート駆使してなんとかするからそれまで我慢してくれ<<1』

最後に書込まれた勇者様の優しい言葉が今日の私の慰めになりました。

勇者様優しさまでマジ勇者！

ネットの酸いと甘い（後書き）

軽視もなにもネットで何を貴方は望んでいるのか。
依存からの構ってちゃんイクナイとイシードに突っ込んでみる。

子供と大人と女

少し寝不足で精神的に地味に落ち込んでいる時は仕事がある事が嬉しい。気分転換に適しまくっている。冷静になれて社会の目線で物事を考える時間が出る。昨夜のことで感じた感情を他人事のように改めて振り返る事ができる。

「おい、イシード。お前に客が来るってなんだよ」

折角の擬似賢者モードでの思考がブツ飛ぶ。酷い言いような言葉が客室清掃の為に開け放っているドア辺りからかけられる。言わずもがな宿屋跡取り息子のバイス坊ちゃんである。

「なんだよって言われても私の方こそ、その物言いはなんだよって言いたいんですか？」

「生意気なんだよ！」

訴えも軽くスルーされ引き続き罵倒である。何についての生意気かさえ思い悩む気が失せる。どっかにいそつなアニメキャラの如く失せる。なぐんて言いたくなつたのは心に秘めておく。今の苛立ち全開のバイスに軽口は良いとはいえない判断だ。

「バイス。何を私に言いたいのがよく分からないんだけど、来客についての事と私の態度に関係する事でいい？」

落ち着いてゆっくりと言葉をかける。子供の言い分を聞く時によく使った物言い。実際バイスは体格はしっかりしているが（日本人に当てはめると高校生並だ）、年齢は14歳だ。今みたいに感情的

になるとそれよりも幼く感じる。

ベットのシーツ替えの手を休め、相手の眼を滅多に見ないで話す私がしっかりとバイスに視線を合わせたまま返答を待つ。

「……っ……」

息を詰めたと思ったら、バイスが逃走した。

返答に窮したのか、我に返ったのか分からないが最悪の事態にはならなかった。興奮した相手に冷静な言動は、余計にあおる場合が多い。悲しいかな子供も大人も、だ。その中でバイスの行動は丸だ。落ち着きを取り戻す時間は出来るしね。そう思うと一番多感な時期でこの判断ができるバイスは確実に大人に近付いて来ているんだな。なんて擬似賢者モードを発動しながら私はベットメイキングを再開した。

バイスを追うわきやない。必死に自分で足掻いてるのを邪魔しちゃいけません。

せつせとやっとお仕事を再開すれば、今度は開け放ったままのドアをノックする音が中断を知らせる。はい、の返事と共に振り返るとドア近くに奥さん。何か急な用事かと思って声をかける前に謝られた。

「ごめんなさいね、イシーダ。いくら多感な年頃といっても貴女を傷つけていいものではないわ」

「平気ですよ、気にしてませんから。誰にでもある通過儀礼みたいなもんですし、私の時はもっと酷かったですよ?」

周りにいっぱい迷惑かけちゃいました、遠い記憶を懐かしむ様に

思いだし、苦笑して言えば目を点にした奥さんが「19歳って嘘じやなかったのね」と呟くのを聞いた。そしてまた謝られた。今度は私の年齢を信じなかった事に対してだ。やっと同じ大人に類する人が私を認めてくれて嬉しい反面、それが詐称年齢なのが引っ掛かり、少し心が重くなった。

「いえ、気にしないで下さい。幼く見えてしまうのは自覚してます。ブランフォードの女将さん達は最後まで信じてくれませんでしたし、逆に開き直って子供っぽく振る舞ってましたもん」

「それで納得出来たわ。女将さんからの紹介状に沢山、子供なのにとかまるで幼子を案じる文面で溢れていたわ」

今度は奥さんと二人で苦笑した。思い描いた人物はきっと一緒。猪突猛進型心配性のブランフォードの女将さんだ。

久々の女性同士の会話はとても穏やかで、心に溜まっていた何か
が晴れていく様だった。

女性のお喋りは最大のストレス発散だと言っていたTVの人に私は大いに頷いた。

子供と大人と女（後書き）

イシードが大人な態度かと問われれば私は沈黙せざるおえない。

お喋りって高等技術だ、と女性と話す機会があるといつも思う。
頭が凄い勢いで起動するのがわかる。わさび柿の種食べた時みたいな感じ。

なんとなく投稿時間変えてみました。べっべべべつに0時投稿に
憧れたとかって訳じゃないんだからねっ

明らかすぎる地雷を踏む

勇者様ご出立wwまで一週間を切った。それでもいつもと変わらない様な雑談を話して和やかにその日を過ごしていた。仕事上がりの私がインする、その時まで。

924:勇者様ww skN5VxAnqQ

おかえりー！ んじゃ<<1も帰ってきた事だし発表しまーす！
なんと勇者様の魔王討伐はパーティ組むらしいよwwww
今更なに言っちゃてんのあいつらwwww 一週間切って団体行動決めるとかマジキチwwww つーかいらん！ ホントいらん！
！ 一人の方がいい！ 俺は何人にもはばかれる事なく貧乳ガン見したいんだあああああ！！！！！！！！！！

そこかよ。さすが勇者、歪みねえー！

<<924 貧乳万歳、(。。(メ(。(メ(。(メ(。
<<924 巨乳万歳、(□)(人)(人)(人)(人)
<<924 そこかよー！

<<924 勇者様はやっぱり勇者だな

<<924 次スレで投下しろよ勇者エエエ

<<924 改行しろ 目が滑る

<<924 雄っぱいもいいよ！

<<924 おいやめろ

再戦するだろ聖戦が

<<956 呼んだ？

〃

i,

, . ,

r' イ>ー、、、r'、ワオ、

/

何、死にたいの？ 死んで？ 貧乳に飢えて死に晒せガキがああ

あああ！！！！

探さないで下さい 旅に出ます

追伸 チート。す能力は何処に行けば買えますか？

久々にスライム（仮）狩りに赴きたい衝動に駆られた、夜だった。

明らかすぎる地雷を踏む（後書き）

掲示板らしさを演出したら面倒この上なかったOrz<マタモド
ソウ

イシーダが<<1と呼ばれる様になってしまったのは、基本イシーダ（石田弥生）はROM専だったのが災いしてテンパって名前欄に<<1と書込んだ事から始まった。以降に名前をお母さんと新たに名乗ったが住民がその名をスルーし、<<1と呼び続けたが為に根負けしたイシーダがその愛称（?!）を受け入れる形になったのがことの顛末である。

書込み慣れていた勇者な彼と明確な差が既にここから始まっている。

更新時間戻そうかな

勇者と失格の烙印を押された者（前書き）

いつもと違います。おバカがほほないです。

勇者と失格の烙印を押された者

その日は朝から慌ただしいという言葉こそが当てはまるに相応しい始まりだった。

イシードが勤める宿屋も道具屋も商いを生業にしている者達以外にも、裏隣りの娘夫婦と同居を始めた少し癖の強い強硬老人さえ空が白みがかつたばかりのまだ薄暗い庭で、興奮に浮かされた顔をはつきり見とめる事が出来たくらいに、街全体で今日という日を迎える事に感情を高ぶらせている。

人々の願いによって神が遣わされた救世主たる勇者が現れてから、ひと月。

神の奇跡と名実ともに体現者たる勇者様の悪しき者討伐への御出立である今日という日を。

隣街であるはずのマシエドの誰もが、逃さぬとばかりに陽も昇らぬうちから身支度を整え、家人を起こし水を汲み上げる女達があちこちに姿を現している。井戸端会議を始めている強者もいるが内容は今日起こる出来事についてばかり。

活動し、準備する最大の理由は、出立式の参加などではない。こちらから行く、その必要がないのだ。

勇者様一行がブランフォードから旅立ち、初めて訪れる街にマシエドが選ばれたのだから。

太陽が上に昇り、満室という喜びの悲鳴より朝食準備や後片付け、客室清掃と猫の手も借りたい悲鳴を上げていたイシーダも漸くこの時間帯には外の賑やかさに、やっと気を向けた。

勇者フイーバー、パネエ！！ 一体どんだけの興行利益効果を発揮するのか……！

絶対に顔見世興行を強請る奴が続出する！ ……勇者様、ファイト。

自室の窓から注ぐ目線の先には街のメイン通りが見渡せる。宿屋としては絶対に押えたい立地条件をここの宿は確保している証拠ゆえの景観だ。

ぼんやりと何を見る訳もなく溢れている行きかう人達を眺めながらイシーダは随分前に響き渡った花火に酷似した音について考えを広げる。

大音量というわけではない、しかし目視出来ぬほど離れているマシエドにも容易に響いた音。イシーダ本人には遠く感じられる距離ではあったが直線上では近い位置なのかもしれない。

花火みたいに打ち上がる物だったんなら……真下とかに居た人は耳が御臨終だな。

あんまりな考えである。他人には吐露できない感想しか浮かばないのは、イシーダの今日という日は他の人々とまったく違う意味を持つ日だからこそ考えたからだろう。

勇者と、同じ異世界に拉致された彼と、初めて現実で会う約束をしているのだ。

彼の出立二日前から昨夜に亘るまで綿密に組み立てた計画。作戦会議といえる話し合いの半分以上は通常と変わらない雑談で話しが

逸れていた事実もあるが。最悪のケース、様々な要因で計画が破綻した場合は勇者な彼がチートでゴリ押しするというお粗末な考えだとしても彼らにとっては計画である。

暫しの休憩を終え、また仕事に戻ってからのイシーダの流れる時間は早かった。常だったら何かしらばやきながら手伝いをしているバイスのちよつかいがないのが原因かもしれない。早朝からの繁忙からやっと逃れられたのである、年若いバイスには勇者訪問は一大イベントだ。これを見逃す事が出来ないのも物の道理。

シーツを畳む作業を止め、雇い主のご主人と奥さんに急かされるように宿の玄関口に三人で移動しご主人が扉を大きく開け広げる。途端にイシーダを襲ったのは声。先ほどから室内にいても聞こえてきていた歓声がより大きく自身を突き抜ける。

身体全体に感じるほど盛大に響く喝采が降り注いでいるであろう、まだ遠くにしか見えない人物に顔を向けた。

顔さえ見えないのにイシーダは視線が絡んだ気がした。

勇者と失格の烙印を押された者（後書き）

読んで頂きありがとうございました。以下、呟き。

うん。やっぱりこの書き方はこの話に合わない。予想外に時間食った。

表現が広がるのはいいけど私の技量では短文（1000文字位）でサクサク展開が不可能になる……！　おーのー！！　あ、すみません小野さんと呼んだ訳じゃないです。

来週くらいから更新時間戻します。

感動の出会いとか期待してない

目が、合った。

運転免許証の眼鏡着用をギリギリで免れている視力しか持ち合わせていない私が。

彼との距離は優に10M以上は離れているのに、今も合わさったままの視線が現実と知らせている。彼だと、一目で分かった。先頭に立ち、仲間を従えているからじゃなく、髪と目の色が同じだからでもない。

本能が、自分と同じ人種であると一瞬で判別した感覚だった。

彼は普通だ。雰囲気も、見た目も、なんら私の見知っている日本人と変わらない。

日本で人混みの多い場所ですれ違っても目敏く見つける特徴は外見には感じられない。

いまだに見詰め合ったまま、彼が笑った。その笑顔はネット越しに、たまに透けて見えた気がした顔そのものだった。気付くと私も笑っていた。ここに連れられてから、初めて自然と出た笑みで彼に応える。

『対象人物を捕捉、記録しました。以降、捕捉者は対象者の現在位置等の情報が閲覧可能になります。』

ポーンと注意を惹く音がいきなり頭の上で鳴った。音に気付くと同時に、ド。その自動案内のお姉さんみたいに明瞭な声が頭に直接

話しかけてくるが……、ちょっと待つて。

今、すごい気に掛かる言葉を言っただけで済んだか？骨伝導携帯
ってこんな感じなのかな、とかのほほんとした考えが一気に霧散し
た。

『コミュニケーション回路構築完了。接続します』

だから待つて！！　なんで事後報告なお姉さん！！　身体は驚
きで硬直してるに係わらず、頭の中に伝わってくる一方的な声に精
一杯の文句を心中で上げていると、別の声が響いた。

『認識した。いい貧乳である。』

成人した男性の声で伝わった言葉で、言わずもがな誰だか悟る。

こちらこそが言いたい、その台詞で認識した、と。

『おい、全部だだ漏れでこっちに聞こえてるから。伝えたいって
思ってから考えてみて』

よし、伝えたいって思ってから・・・

『だからそれも聞こえてるって』

どうすりゃいいんだ！！　おばちゃんには難しいんだよコノヤロ

！！！！

多分これもきつと伝わったはず、といつの間にか顔がきちんと分
かる位まで近くに来ていた彼に意識を向ければ、誰かが勇者の真横
についてピンポイントに私の視界を邪魔する。

勇者一行の兵士だ。

『クソツ、いきなりなんだよコイツ。こっちは頑張って横目だけで貧乳鑑賞に勤しんでたつてのに！』

オイ、聞こえてるぞ。といつもなら突っ込みを入れる所なのに、勇者を隠す様に私の視線の間に入った兵士から、私は目が離せないでいる。

『どうした？　オーイ！　……何かあったんですか？　石田さん』

深刻な声音に変わり、口調まで変化した勇者の問いかけに、固まっていた意識がやっと戻る。でも頭に浮かぶ言葉は一つだけ……。

レス

それしか出てこない。思うと同時に、口からも言葉として出していた。

なぜ、彼が一緒なんだ。そんな疑問だけが今の私を支配した。

感動の出会いとか期待してない（後書き）

勇者様wが横目で貧乳鑑賞頑張ってたのは事前に申し合わせたから。

顔を向けて見ると、イシーダを他の人（パーティー行「神殿関係者」）にも認識される危険性がある為。勿論この提案はスレ住人のエロイ人が発案。勇者は堂々と面を向かってガン見する気満々でした。乳を。

それは女の勘ですか？それは厄介ですね

未だ凝視し続けていると、レッスが一瞬だけこちらに顔を向けた。
お互いの視線が交わる。

……笑った？

……微笑んだ？！

またすぐに逸らされ、レッスは前を向く。勇者の盾になるように
そのまま私の前を通り過ぎて行こうとする勇者一行。

『……腐ってやがる、まだ早すぎたんだ』

そんな有名な台詞を吐いたのは勇者だ。名作は40年の歳月など
関係ないという証明を残して……ってちょっと待て！ 知性を感じ
させた勇者様戻ってこい！ 今すぐだ！

『ダメ。このまま街のお偉いさんところ行くんだって。今戻ったら
俺の横目ガン見の苦勞が水の泡でーす』

物理的戻るじゃなくて！！

『はいはい分かりましたよつと。まず安心して下さい、距離が離
れようとこの会話は続行出来ます。石田さんに直通回路を作りまし
たから。あと、イケメン兵士と石田さんとの関係ですが、恩人の宿
屋息子兵士……での認識でいいですか？』

そうそうそう！！ なんだ、ちゃんと考えてるんだ……安心した。

『疲れるから戻す。誤解させちゃってすまんね、こっち来てからはスレン時とまんま同じ様に本能のままの態度だったし、……最初はバカに思わせる狙いだったけど。いやゝ楽でいいよこれ』

なんだ、彼も私と同じだ。ホツとして遠くなりつつある勇者の後ろ姿を眺めていると肩に手が置かれる。振り返ると、奥さんだった。

「イシード見た？　もしかして勇者様の横に居たのって……」

「え、ええ。LESSが来るとはあったけど、まさか勇者様一行として来るなんて凄いビックリしました」

「ふふふ、さっきこっち見た時のLESSの顔ったらないわ！　私達なんか眼中に無いって感じにイシードだけ見て。あの鼻垂れ坊主が一丁前に男の顔してる」

なんとも返しづらい。奥さんは少女みたいに楽しそうにしてる、何事も恋愛関係に結び付けたがる悪い気配が漂っているのは気のせいではない。これは……迂闊な事は言えない。

『なんか取り込み中みたいだから一回切るな。こっちも色々終わらせたらまた繋ぐから』

一方的な彼の言葉が終わると最初に聞いたお姉さんの声で『コミユニケーション通話終了しました』とまた事後報告が入った。終了という響きに少しだけ不安が顔を覗かせた。

脳内でのやり取りで私が黙ってしまったのを奥さんは好い様に解釈してしまったらしく素晴らしい事を言った。

「LESSはちゃんと貴女を大人として見てるのね」

どうやら私の選択肢は即否定が正解だったらしい。いや、どう答えてもそっち方面に解釈されたに違いない。

「いえ。レッスは私の事、年の離れた子供な妹くらいにしか見てなかったですよ？　そもそも彼に対してどうこうなる的な考えは一切ありません。ありえません」

「もう！　皆が信じないからって不貞腐れてそんなに意地張らないで？　大丈夫！　そんな考えは杞憂よ、一度きちんとレッスと話さない。街に来てこのチャンスを逃しちゃ駄目よ」

ほらね？　私の後半の言葉なんか丸ごとスルーした！！

もうやだこの不毛な会話。てか会話が成立していない。

結局、旦那さんが身重な奥さんを労わって中に入るよう促すまでこの話は続いた。案外早く旦那さんが行動してくれたのは、私があからさまにうんざりした顔をしていたからであろう。こればかりはしょうがないんです、好きでもない相手をくっつけようとする会話ほど嫌悪するものはない。

まだ話し足りないと不満気な奥さんの腰に手を回し、中に連れてって入るご主人が顔だけ一瞬、私に振り向く。その顔を見て私の意思は明確にご主人には伝わっていると理解できた。

『これだから女ってやつは……すまないね』

今にでもこう聞こえてきそうな苦笑を浮かべたご主人の顔。

私は頷いて応えた。

それは女の勘ですか？それは厄介ですね（後書き）

うまく進展しないじれんま。

書きたい事がありすぎて文字数が増える罫。

はしよるスキルを会得したい。

頭パンしたら糖分摂取が効果的

宿屋に戻り、まだ何か言いたげの奥さんをご主人が椅子に座らせている。グッジョブご主人と心の中で親指を立てて、やり途中だったシーツの畳み作業に没頭した。

手の動きと思考を分断して、考えるのはレッスが勇者一行に入っている事で今夜勇者と落ち合う計画にどんな邪魔が入るかだ。レッスも何かしらの情報を持ってきているはずだけど、私の最優先事項は勇者との対面だ。今の状況ではレッスの存在は邪魔としかいいようがない、情報があるとなിとは生死を別けると、分かっているけれど！

今の全てを理解している人物と会って話したい……それだけ。たった、それだけなのに。

レッスのあの行動は勇者に私を認識させない目的が今の所濃厚な線と思われ、それで仮定し私と勇者の個人的な接触を断とうとしているのは分かる。レッスにも何か拙い事情があるものと一先ず察するでしょう。

でも、ちよつと待てよ？

彼は私の「味方」なのだろうか？

よく思い出せ、私！ 今までにあつたことを！！レッスが恩人なのは決定的だ。野垂れ死ぬのを助けてくれて、保護し職まで用意してくれた。女将や旦那さんも家族然と接してくれた。……………レッスは？レッスはどうだったろうか？仕事であまり接する機会

もないく、会話はあまりなかった。今回の勇者召喚に関する事が初めてレッスから貰った情報だ。

もしあの時の行為が監視などの目的でされた行動だったら？

わからない。

私には分らない。

レッスという人物の情報がほとんどない。

知っているのは宿屋夫婦の息子としてのレッスだけしかない。

敵か味方かは判断できず、「不明」としか私は言いようがない。匿り、危険を知らせてくれたのは善意と思っていたい、けど同時に最大限の警戒対象人物として接しよう。

レッスも神殿に係わる者であるのは変わらないのだから。

自分の足りない頭で対策を出し、手元を見ればラストの一枚だった。自室の隣にある備品室に運び、そのまましばし休憩と自分の部屋に入りベットに腰かけて手を振り、いつもと変わらない音がピツと鳴った。

まとめサイトの方に何か進展はないかと左下の隅にあるGマークを見たら、左隣になんか

「call」のマークが増えてる！！馬鹿な私でもこれは分かる。

勇者が回線がなんたらいつてたのはこれか！！

早速そこに触れると横に新しい項目がスライドして出てきた。P Cっぽい出来た機能ですね、さすが勇者様です。私のスーパーフアミコンのRPGメニュー画面ばいのとでは、マッチせず違和感バリ

バリです。

愚痴りながらスライドした項目の一番上にあるフレンドに手を向けたら、今度はその前面に新しい画面（後ろのは全部半透明になった）が出た。ハイスペックが憎い。

画面には「フレンド」と書かれ、勇者の顔画像まで載っている。……なぜにこの画像を登録した、勇者よ。半目で涎垂らした間抜け面の変顔とか……勇者エエ。

画像下に短縮設定しますか？ とあった。どうせ勇者専用回線なので直通短縮設定した。

callボタン一つで即勇者。なんだろうこの110番並みの安心感。

勇者のチートに嫉妬が止まらないまま今度こそまとめに行く。MP節約の為、言いたい事だけ書いて逃げてみる。

439:<<1 qTWB・m2f1c

パレードwww中の勇者一行を見てきた

無事、両方共に確認完了 あとは夜を待つのみ

追伸、恩人の宿屋息子がイケメン兵士だった誤算が生じました

エロイ人対策ヨロ！ 暇見つけてまた来るね〜書き逃げサーセン
www

次に来れるのは夕食の片付けが終わったら。

それまでは皆に丸投げしてみよう、もう自分は頭パンしました。

厨房に行き、ため息が出そうになった。満室での夕食って考えただけで疲れてくる。品数はさほど多くは無いけれど量が半端ないから下ごしらえが鬱になりそうな勢い。ご主人はもう準備を初めてた

から急いで指示を仰ごうと近づけば野菜の山から聞きなれた罵声。

「サボってんじゃねーよ」

そんな芋剥き中のバイスをまるっと無視してご主人に謝り、野菜をひたすら切る仕事を貰った。忙しくなる時間帯には帰ってきてるバイスを内心で褒め、これなら案外早く終わりそうだと感謝した。

日が落ちた頃にもう片付けが始まった。満室等の繁忙時は夕食がバイキング式、それに伴って夕食時間が早まるとご主人が教えてくれた。実質、ご主人 バイス 私だけで個別出しの給仕までは手が回らないのでとてもありがたい。家族運営ならではのスタイルだな。

そんなこんなで食器洗いを無心でこなしていれば、気の抜けたようなポーンという音が頭に響き、あのお姉さんの声が喋りかけてきた。

『勇者様からc a l l が入りました。接続しますか？ 強制接続された為、接続します』

待つてました！ とばかりに私はY e s と答えようとしたのに、突然続いたお姉さんの言葉がとてつもなく異常に聞こえたのは気のせいではないだろう。

勇者ってなんでもありなんだね。

そんな感想から待ちに待った私の夜がはじまりました。

頭パーンしたら糖分摂取が効果的（後書き）

1000文字の自分ルールを破ってみる。えれー疲れた。

……毎日更新するはずじゃなかったのに、何故かしてしまう。

まあ、いいか。書けるうちは。

初めての訪問者

洗い物の手を止めず、頭に伝わってくる声に意識を集中させる……
前に勇者の声が聞こえた。

『こっちは準備万端！ 石田さんは洗い物したらOK？』

やけに楽しそうな声音なので「おら、ワクワクすつぞ！」なんて有名な台詞が頭によぎった。ってか待て、なんで洗い物してるのわかるの？ チート？ それもチート能力なのか？！

『残念、はずれ！ まあチート使ってもわかるけどね？ やはり貧乳こそ至高！！ 思う存分ガン見出来るって素晴らしい！！！！』

おいおいおいおい！！！！！！！！ 勇者、貴様居るのか？！ ここに！！！！？

即、厨房内の周りを見渡したけど食器を戸棚に仕舞っているバイスしか居ない。あ、目があった。顰めっ面して「サボってねーで手を動かせ」とお小言を頂きました。今回は反論できません。素直に洗い物作業を再開。

『あはは、怒られた。中には居ないよ、正解は見えない様にして外から窓覗いてガン見に勤しんでいます』

いい加減、胸ネタから離れて下さい。お願いします、そろそろ暴れますから。

『……………こっち来る前にまとめ覗いて来たらアッチでも混乱し

てた。レッスのネタが少な過ぎて全然まとまっない感じ。警戒しろ、だって」

てか妙な間が気になるけど……

『気にしたら負けだ』

ですよー！

それから洗い物が終わるまでレッスの事について話し合った。私の持つている少ない情報とまだ会って数日の勇者との情報を交え、憶測し対策を練った。

その結果は「なんかあつたら勇者c a l l する」で終了した。

途中までは真面目だったんです、すみません。終わりの見えない議論に根を上げたのは私です。ぶっちゃけレッスが会いに来るのは決まってるんだからその時に聞けばいいじゃん！ って私の発言に難色を示したのは勇者だった。やはり彼は心配性である。

気楽に構える事が出来たのはレッスと同時に勇者もまた同じ街にいるという安心があるからだと思う。だけど昼間考えた対策は守る。全部勇者任せではあいつ等と同じになっってしまう。まあ多少でも違う結果になるだろう事を願う。

細々とした仕事をしていたらご主人が来て、今日の仕事上がりを伝えてくれた。流石に満室でお風呂が込み合ってるから、空くまで待ってから入ってと付け足された。頷いてご主人にお礼を言い、勇者に一先ず自室に行くことを伝える。

返ってきた返事は「着いたら窓開けて」だった。

夜に女性の部屋を訪ねるってか上がるもんじゃないとおばちゃん言いたい。

あ、おばちゃんだからいいのか。

自室に着き、まずドア鍵。それから窓に向かう。さっきから「はやく〜はやく〜」と催促が煩い勇者を黙らせる為に窓を全開にして、数歩下がる。

「はい到着。窓閉めて、カーテンもお忘れなく〜」

頭でなく直接耳に聞こえた、声。

特に何か変わった様子はないのに、彼が訪れた事を明確に知らしめてくれた。

今度は間近で聞こえ始めた催促に私は慌てて窓に近付き、窓とカーテンを閉める。

振り返るとそこには

私と同じ、日本人が居た。

日本人が二人

昼間、通りを歩いてた彼が目の前にいる。同じ黒目黒髪、この世界に居るからこそ分かる、同民族独特の雰囲気。

「……………」
「……………」

え？ この沈黙どうしたらいいの？　なんでこんな日本独自の気まずい雰囲気になっちゃったの？

あれか？　お見合いの席で後は若い人同士でっていう無茶ぶりされた感覚なの？！　それとも噂に聞くネット仲間や文通相手とリアルで会った時の何とも言えない雰囲気ってやつですか？！

今更だが自己紹介するべき？　初めましてって言った方がいい？　実際に話すのは初めてだから変じゃないよね？？

「…………えっと、あの…………初めまして？　ゆ…………勇者さん？」

言ってから気が付いたけど私、彼の本名知らなかった…………。

「あ、えと、はい。初めまして、石田さん。…………ひょっとして俺の名前、ご存じ無いですか？　一応まとめの方で人物紹介コンテンツに載ってるんですが…………」

「す、すみません。あんまりそこら辺は見なくて…………スレでの印象が強くて勇者として認識してました」

「…………あ、いえ、はい。そうですね、すみません。では改めて自己紹介しますね。石田さんと同じ関東在住で普通の会社員してる

独身22歳、学^{マナブ}と言います。苗字は流石に危ないので名前だけすみません」

これぞ日本人、という会話だ。すみませんという言葉が久々すぎて泣きそう！

結構長くこつちに居るが今の今まで「すみません」という単語を聞いた事がない！！

普通の自己紹介なのに彼との会話は色々と私の琴線を刺激する。なんか泣きそう。

勝手に渗む視界を我慢して、少し気になった事を含めて私も自己紹介をする。

「いえ、ご丁寧にありがとうございます。知ってらっしゃると思いますが私も自己紹介を。関東住みの主婦で29歳石田弥生です。就学前の息子が一人います。……あの、苗字が危ないってネットだからですか？」

そこが気になった。今は別に大衆の目に晒されるネットの場ではない。苗字を教えてくれないって拗ねている訳ではない、私も本名ではない。ただ妙にソコが引つ掛かった。

「すみません、やっぱり気になりますよね？でも良かった、石田さんがこつちでは旧姓の苗字だけを名乗っていてくれて。あまりいい事じゃないのでスレの方でも言っていないのですが……」

そこまで言いかけて勇者こと学君（この名前を聞くと学生時代の頭のいい同級生を何故か思い出す）は「今夜は長丁場になりそうなので」と、言いながら上着の内ポケットをまさぐってポットとカップを出した。

どこから突っ込んでいいか分からない位、おかしい。主に内ポケット！ ドラ。もんが四次元ポケットからなんか出す時の物体の歪みを今リアルに目撃したぞ私！！

「あ、これ便利でしょ？ これの事も追々話しますから先ずは苗字から行きましょう」

受け取ったカップに学君が注いでくれたのは珈琲だった。

ずっと飲みたくて渴望していた珈琲。視界がぼやけて鼻水が垂れてしょうがないが学君はその事には触れず、「牛乳と砂糖いりますか？」と聞いて来たから「牛乳だけ」とちゃんと発音出来たか怪しい返事をして、焦がれた珈琲をカフェオレにして飲んだ。

それからは彼の独擅場だった。私の顔色を見て分かってなさそうな所は捕捉をしたり、分かり易い例えで理解を促してくれたり、教師というより企業のプレゼンを思わせる話し方だった。プレゼンなんかに参加したことないけど、多分こんな感じだろう。

「こうやって喋れるのが嬉しくて長々と説明してしまいました、要約すると本名の姓と名の両方を知られると魔法で色々監視されちゃうって訳。俺の場合、教えなかったから今回みたいにパーティって形の監視が付いた」

最初から要約して言うてください。ついでに話してる内に彼の敬語は崩れていき、いつもの勇者様w的な口調に変化した。

「高い確率で洗脳、服従的な事も出来ると思う。召喚なんてぶっ飛んだ事出来るんだから魔術のレベルはかなり高いよ、ここ。それが間違った方向なのが痛いけど」

「それは同感」

「んじや能力的な話しね。俺の事チートっていうけど、石田さんもチートだと思うよ？」

「はあああ???!!!!」

間髪入れずに反応してしまった。これには反論しか出来ない！

「はいはい反論は後で。俺の能力での？　なんだと思う？　ゲームみたいに特技やスキルではないんだなーこれが。属性もなにもない、能力は一つだけ。」

そこで学君はまた間を空け、珈琲に口をつけた。ついでに彼はブラック派だ、胃が傷むから牛乳入れなさいと注意したらお母さんがここにいる！と茶化してはぐらかした。

学君がカップから口を離して言った続きは、私にはよく分からない事だった。

「《認識》する能力。だと、俺は思ってる。この内ポケットの原理は、有名な四次元ポケットだと認識したから、この内ポケは四次元に繋がって物の出し入れが《出来る》。思い込みと似てるけど決定的に違うのは《そうである、と確信している》ってのがポイント。出来るかな？　なんて思ってたや出来ない。出来て然るべきって認識でないとダメ」

そんな難しいから俺はハマってたゲームを土台にしてる、そう付け加えて学君は内ポケから焼き菓子を取り出して食べた。呆然と

しながらも私は差し出されたそれを受け取り、口に入れた。美味しい。先に咀嚼し終わった学君が言葉が続ける。

「皮肉なのが勇者って立場にされたからこの能力に気が付いたつとこ。最終的に自棄になって勇者なんだから出来んだろっ！て色々試したのがなかったらヤバかった。認識するまでは持ってたノーパソでしかスレに行けなかったし、そこん所は石田さんに感謝。石田さんが気合的な何かでアクセスしてるって事実で、俺にも《出来て然るべき》って認識させた」

だから、ありがとう。

照れくさそうにハニカミながら彼、学君が私にお礼を言う。それを聞いて私はこちらこそ、ありがとうと言おうとして言葉が出なかった。

「……………まいったな、なんか俺マズツた？ ……ごめんね？ 土下座して謝るから、石田さん？」

違うと伝えたくて左右に顔を振って意思表示する。
まだ声は出ない。のどがキュツと締まった感覚が続いている。
ボロボロと零れるのが煩わしくて顔ごと両手で覆って隠す。

「……………だから……………泣かないで？」

そう呟くようにしか聞こえない学君の声も、……………少し震えていた。

嬉しかった。嬉しかったの。

私でも、彼の役に立てて。

学君ごめんね？ 涙はしばらく止まらなそうだ。

日本人が二人（後書き）

二つに分けようとしたけどダラダラしそうだったので色々はしょって更新。次回、空気だった彼がようやく……！　だいいいな。

私が私で彼が彼で

うん、ティッシュは素晴らしい！ 日本の文明のありがたみをヒシヒシと感じる。

顔面グツグツジュな私に「ん」とだけ言ってポケットティッシュを差し出してくれた学君テライケメン！ ぶっきらぼうな態度が私のツボを刺激しまくってくれた。

もちろん受け取ったティッシュで遠慮の欠片もなく盛大に鼻をかんだ。一回ではなく三回位、丸めて鼻の中まで綺麗に掃除するの忘れていません。

「石田さん男前過ぎる！ もはや女のおの字すら見当たんねえ……だがそこがイイ！」

褒められた！ ……褒められた……んだよね？

汚物は消毒だー！ なんてノリノリに使用済みティッシュ内ポケに入れてるけど……片づけてるだけなんだよね？

「ああ、うん、勝手に学君を身内認定しちゃったから遠慮なんかなしの方向でよろしく」

「されちゃった？！ 俺勝手にファミリーにされちゃった！？」

ふざけんなよ超嬉しい！」

さっきまでの号泣が嘘のように二人でふざけ合う、なんだか気の合う弟が出来たみたいで嬉しい。お互いに恋愛感情は発生しない、私は年下に一切食指が動かないし学君は既婚者な所でアウトだと言っていた。多分こいつ処女厨だろ。代わりという訳じゃないが家族愛みたいなものを私は彼に感じる。

「これからよろしくね、まーくん」

「うおおおおつなにこの幼いピュアだった頃を強制的に思い出させるあだ名は！この年でまーくん呼ばれるとは思わなんだ！！」

「ふふふふ、私の事はやっちゃんと呼んでもいいよ？」

小学校時代のトラウマなあだ名だろうとこの年では素敵なネタとして受け止められる私の余裕をみせてやろう。くくくく。

「やっべ、超呼びてえ！ なにそのネタ臭しかしい呼称！！でも呼べねえ！ 呼べねえのが悔しいiiiiiiiiiiii」

なんで？ と思いつき顔に出たのかまーくんが説明を開始した。

曰く、リスクが付きまとうらしい。名前呼びが癖になってうつかり誰かに聞かれたら即アウト。あだ名だろうがその人物を表す言葉で魔術をかけられるみたい……もはや呪いです本当にありがt（ry）

「んなで俺はいつしーと呼ぶ、答えは聞いてない」

「ひねりな」答えは聞いてない！！」

ムキになるまーくんにこちらではイシーダと呼ばれてるとカミングアウトすると、まーくんはマーナブと呼ばれてると逆告白されたので爆笑した。微塵の遠慮もなく涙流しながら笑った。腹痛いっマーナブはないだろう、マーナブ！！

マーナブマーナブ言いながらやっ表情筋が落ち着いて、非常に重要な事に気が付いた。

「どうしようー！！ 爆笑しちゃったけど周りに一人で馬鹿笑います

る変なやつとか思われる!!」

「……今更かよ」

この世界の建築物（木製）の防音性能は紙である。

本当に今更だ。散々まーくんも叫んだり大声出していたし、聞かれたらヤバすぎる！

「はいはい、そんな絶望したっ！ 的な顔しないでヘーきだつて。安心安全チートでこの部屋入って速攻でプライバシー侵害イクナイ結界張ってある」

「そのネーミング」声はもちろん振動まで完全シャットアウト！扉の鍵を掛け忘れていても自動で封鎖されるのでまあ安心！地震雷火事親父いかなる邪魔もバッチリ防ぎます!!」

本人にも分かってるみたいです。私に最後まで言わせない位ちょっとアレかなって思うなら名前変えればいいのに。

「まあそんな訳だ。安心しろ、いつしー」

「トテモスバラシイデスネ」

「……真面目な話しになるけど、これからについて話し合おう」

話を逸らしたな、まーくん。私の完璧な棒読みを完全スルーするとは！

心なしが真剣みを帯びたまーくんの目に、私も仕方なく真面目な顔に切り替え、言葉を待ったため口を閉ざす。

まーくんが軽く息を吸って口を開く、そのタイミングで木を叩く音が部屋の静寂を破った。

「おい、イシード起きてるか？ お前に《お客さん》だよ」

ノックの後に続いたバイスの声で、今まで暖かく楽しい空間が霧散し、代わりに空気が張りつめる。

でもバイスに返した私の返事には緊張や怯えなんか少しも入ってなかった。

私は一人じゃ、ない。

私が私で彼が彼で（後書き）

勇者マーナブ 自称身長170？ 異世界において、いかなることがあるかと彼は身長を測らす事はなかったという。

実態は会社の健康診断で169.8という記載にいつも涙しているピュアな青年である。

二度目の訪問者

まーくんの行動は早かった。私がバイスに「はいはいちょっと待って」と返事をした瞬間に頭には慣れてきた音とお姉さんの強制回線接続を伝える声が響いた。ベットに座っていたまーくんを見遣れば姿が消えている。カップやお茶菓子等と一緒に。

驚いて目を見開くとまーくんが頭に話しかけてきてくれた。

『大丈夫、俺いるよ。心配ならいつしーに半透明で見えるように出来るけど気が散るかな』と。もう結界解除してあるから俺にリアル話し掛けしちやいゃん』

一気に気が抜けた。ゆるい、ゆるいぞ、まーくん！ だがそこが素敵！！

はっはっはっ、惚れる！ 俺に惚れるがいい！ 等と相変わらずの会話をしてから私はドアノブをひねり、扉を開けた。そしてそのノリのままバイスに爆弾を投下してみる。

「バイス坊ちゃん、その言い方だと私が夜のお客さんを取るお姉さんみたいに聞こえるんでもう少し言葉を選んで下さいね？」

まーくんの「うつわ、セクハライクナイ！」の発言はスルー。バイス坊ちゃんに年上である事意思表示に最も適した対応がセクハラ発言なのだから仕方ない。うん、仕方ない。

爆弾を落つことされたバイスは見事直撃したのか顔が凄い……真っ赤です。なんだろうこの快感は、見た目高校生の純情少年が赤面して……可愛い……だと？！

ニマニマしながら沈黙中のバイス鑑賞に勤しんでいると、ふっと影が私を覆う。原因を確認しようと自然と目線が持ち上がる。バイスの後ろに長身の男、この首が痛くなる感覚は覚えがある。

「……ご無沙汰致しております、レッス」

「久しぶり、イシード。元気そうでよかった……ここではなんだからお邪魔してもいいかい？」

本日二人目の男性入室ですか……別にいいですけどね。

どうぞとドアの前から下がり、進路を譲る。けどそこに待ったの声を掛けてくるバイス坊ちゃん。あらやだこの子が一番常識的だわ、おばちゃん感激！

「おいおっさん！　こんな奴でも一応女だぞ、夜に部屋に入るとか常識ねえのかよ！　下のリビングで話せ」

いいぞ、もつと言え！　バイスに心中で声援を送り、その提案に乗った！　と言わんばかりにドアの前に立ち、また進路を塞ぐ。……塞いだはずだった。

私の意図をくみ取ったバイスが、着いてこいとドアの前から少し体をずらした。その隙を突かれた。一瞬出来たその隙間をレッスは易々と抜け、室内に入り私の背後に立つ。腕をお腹に回され、後ろに身体ごと引かれた。呆然とした顔をしているバイス、私も同じ顔をしているはずだ、それくらいほんの一瞬の出来事だった。

「失礼なのは分かってるけど、二人きりでしたい大人の話しがあるんだ。案内してくれてありがとう、おやすみ」

バイスに向けられた言葉。

一方的に言い終わるとレッススがドアを閉めた、勝手に私の断りも無く。

一言、言いたい。

紛らわしい言い方すんじゃないねええええ！！！！！！！！

どこから見ても聞いても誤解しか生まれないレッスの行動に殺意が湧いた。

ついでに「お、やるねー！」とのんき発言した勇者まーくんに

二度目の訪問者（後書き）

恋愛フラグは立てない方針なんだけど……勝手に立った？ え？
なんで立つの？ いやいやいや、これは気のせいだ！ 気のせいな
んだ！！

好かれちゃって困るわん（ハート）は容姿村人以下のイシードに
はあり得ない……そうであろう。

t r a u m a t i c e x p e r i e n c e

閉ざされ部屋、沈黙。ドアノブに手を置いたままのレッズ。殺意の意思とは裏腹に固まってしまった私の身体。バイスが反論してドアを開けてくれるのではないかと僅かな希望を頼りに耳を澄ましていると薄い扉越しにバイスの舌打ちと離れていく靴音が無情にも聞こえた。

私は何を期待していたのだろう。

14歳の少年があ言葉論破するのを？　そもそも訪ねると事前に連絡を貰っていたのだ、それには私の事情も絡む事柄が話される確率が高い。やり方はどうであれレッズの行動は正しい。頭では分かっているのに、私は逃れたくて仕方がない。

この腕から！

旦那以外の男の体温から！！

気持ち悪い。触るな。私に触るな！　新しい命を、旦那の子を、息子の兄弟が宿るはずの私のお腹に触らないで！！！！！！

なに出不ない、声。ますます症状が悪化しているのは、体が、心が、あの恐怖を思い出してしまっているから。

何を言おうが叫ぼうが存在を無視され続け、人としての誇りさえ捨て泣き喚き縋り付いて懇願したのは《息子の所に還して》の一つだけ。その私の願いを叶えさせる唯一の人物から無慈悲に、手加減さえせず力任せに腕を掴み引き離れた、あの痛みしか感じない、手

の感触。

その手の持ち主の、レッスが、触れている？ 私、に？！

『いつしー！ おいつ、いつしー！！ しっかりして下さい石田さん！！ 石田さん！！』

軽い一瞬の衝撃の後、声が聞こえてきた。正確には途中からやつと聞こえてきた。

目の前には後ろが透けて見える半透明なまーくんが居た。彼の手が宙を切った形になっているのから気付けの衝撃の正体がわかる。

『まーくんありがとう。ごめんね？ 女ぶたせちゃって』

『いえ』と答えただけの彼の表情はいつになく真剣なものだった。一瞬で崩壊しそうになった自分の精神の弱さに舌打ちしたい気分だ。

「レッス、もうバイスは行きましたので離して下さい」

後ろは振り向かずによく言いたい言葉が言えた。レッスは返事の代わりに直ぐ腕を解き、身体を離す。私も不自然にならない様に距離を取り部屋を見回して、困った事に気づく。

椅子と寝台しか座る場所が無いのだ。

レッスに椅子を勧めると必然的に私がベットに腰かける事になる。それで普通なのだろうが、なんかその、ヤダ。自意識過剰と言われてもいい、嫌なものは嫌。その逆でレッスがベットに座るのも嫌なもんだから困った。

そもそも部屋には親しい人しか上がらないものなのでこのパターンは初めてだ。

まーくんは私が勧める前にベットに座ったので、空気の読めるよく出来た日本人である。警戒されるより嫌悪される道を選んだ。それは私にとって正解です。

こんな事で悩んでもしょうがないのでキツパリ諦めよう。

「よかつたら座ってください」

「ありがとう」

椅子に手を向けレッスに着席を促す。ベットと言う選択肢は選ばなかった。

私はどこにも座らない。

立ち位置がさり気無くドア近くなのは決してまーくんを信用していないからではない。自分で出来る最低限の警戒がこれなのだ。ついでにまーくんはいつの間にかまた透明になったみたいで見当たらない。

『いや、居るからね？ ついでにいつしーの考えもただ漏れただけかな？』

そこは遭えて言わないでおくのが日本人でしょ、まーくん。

椅子に座りこつちを見たレッスが苦笑する。

「イシーダも、って言っても君は座らないよね。うちに居た時は

そうだったけど此処でも？」

「すみません、座ってしまうと首が痛いままなので。お気遣いありがとうございます」

勝手にすみませんが出てくる日本人の特性が若干憎い！

いや、気遣いを無下にしてるから謝罪はありか？ ああもつこんな事考える事態マンドk（ry

『貴様まさか鬼女でありながらそのいゝあばばばばばば』

まーくん自重。今は黙っててくれ。

「色々聞きたい事はあるんですが……何か緊急を要する事が起こったんですか？」

用があつて来たくせに一向に本題に触れないレッスに私から話しを振る。

私のその問いにレッスはまた、苦笑した。

t r a u m a t i c e x p e r i e n c e (後書き)

レッスのターンが終わらせられなかった……！

でも久々にシリ阿斯さんが顔を覗かせて……くれたのか、果たして。

サブタイの解釈が合ってればいい……な……o r z

美形長身の考える事なんか心底どうでもいい

レッスのその苦笑を見て私は彼の笑った顔を昼間の一回しか見た事がないと、立ったままふと思った。

宿屋に居る時は基本、無表情。女将さんや旦那さんと話しをしていても何かしらの感情が顔に出ることはなかった気がする。稀な私との会話では高確率で苦笑していたがどちらかというと自嘲的な感じを受けた。今もそう。

「急を要するって訳ではないけど、知っていればイシードも安心する話しかな？ 前召喚者搜索の隊は勇者様出立に伴い解散。情報が少ない上に時間が経ち過ぎている、生きていたとしても表立った場に居ないのならもう人として扱われている可能性が低く、判別や勇者様との遭遇の危険はない、そう方針が決定。不測の事態に伴い、対象者と唯一接触があつた俺が抑止力として出立の同行者に決まった」

私にとって喜ばしい事柄も含まれるのに、話しの要件を喋っている時のレッスの口調がとても恐ろしいと感じた。機械的というのか感情が一切籠っていない、その命令を言つた人物の言葉そのままを再生して聞いている感覚。心底どうでもいい、無駄な仕事を増やしやがって目障りだ、と本人に言われた様な錯覚がする。

「イシードの知りたい事も大体これで分かると思うんだけど、どう？」

「……少し考えさせて下さい。衝撃過ぎて何が聞きたいかちょっと吹き飛んでしまったので」

あまりの言われ様にちよつと動揺している。突っ込み所は多々あるけど……人として扱われてないってなにそれ。拉致されてから人権無視されてる人なんか私、見た事ないよ？

平和で豊かに見えるのにどこの世界にもアンダーグラウンドな闇があるのか……大通りを絶対使うつておばちゃん決めた。鼻歌交じりに探検くなんて童心に戻つて細道裏道突き進むのもうやめる。

『いつしーその考え逸れまくってるからね？ 今の話しの結果だと、馬鹿め！ お前を生かすも殺すも俺の采配一つだ、ふはははは！でFA』

『それだ！ まーくん偉い！ まじ勇者！』

ナイスフォローに心中でm9(。A)っ ソレダッ！！の顔文字を送ろう、まーくん。

一番ハッキリさせたい事はレッスの意向だ。味方がそうなのかまでは分からなくとも害悪になる考えの持ち主なのかだけは判別させたい。律儀にも黙って待っている無表情なレッスに、まずは軽いジヤブ。

「昼間の事が気になったんですが、なんで行き成り勇者様の横に？ 私から隠す様に思えたのですが」

「やっぱり不自然だったみたいだね。ごめんね？ 勇者様の能力は未知な物が多くて、もしあの場で彼にイシーダが同じだと気付かれると……その、彼は結構少年の様な性格をしているからその場で騒ぎ立てでもされたら他の同行者への隠滅は難しいと判断したんだ」

またも苦笑を浮かべたレッスの答えは思いがけない気遣いでの行動だった。意外な考えだったので嬉しく思う、が！ 私はレッスが発した初謝罪に天にも昇る心地である！！

よっしゃー！！！ 恩人とは言えども一度でもいいから
謝らせたかった……！！

女つてのはなあ、自分を傷つけた人間へのしつこさと強固さは並
じやなんだよ。ハッ。

『怖いよーここに鬼がおるー！ いっしーにリアル鬼女の片鱗が
見えて全俺が泣いた』

まーくんの呟きで得意になっていた気持ちをなんとか落ち着かせ
る。そうだ、まだ話しの途中だ。まーくんのKY発言まじチート！

「お氣遣いありがとうございます、LESS。彼に是非会いたいの
ですが、対面は叶うでしょうか？」

「残念だけど……それは叶えてあげられないかな。イシードの所に
来る前に同行者達と話し合って、明日の朝ここを立つのが決まった
んだ。道中の勇者様の足が思うより速く、次の町までも問題ないと
の判断で。だけど彼は無理してたんじゃないかな、と思うよ。」

早々に夕食を済ました後、街議会議長に宛がわれた客室のベットに
直ぐ籠ってしまっただしね。相変わらず苦笑交じりで言うLESSだけ
どいつもと違う雰囲気漂っている。言葉や表情に感情が薄っすら
滲んで見えた気がした。

『ついでに今もベットに籠ってるのはオレオレ！オレだよ！ダミ
ー1型君です』

お願い。今は喋んな、学！ お母さんお話し中だからね？ いい？

『ごめんなさいお母さん』

気を取り直してレッスに集中しなければ。なんか頭使いすぎてパインしそうだ。チョコ食べたい。うん、あとでまーくんに出して貰おう。まーくんなら持つてる、はず！

「そうですか、無理言つてすみません。……あのレッスの中では私を神殿に突き出すって選択肢はあるんですか？」

私の直球すぎる質問に珍しくレッスがビックリしてる。目が点になつてんじゃない？　つてくらいの実にいい見開きっぷりだ。もう遠まわしに聞いたり、言葉選んだりとか面倒臭くなっちゃったんですよ、おばちゃんだから。

私の超直球発言の衝撃から立ち直つたらしく、レッスが苦笑した。もう合図は苦笑認識でいいよね？

「その選択肢は俺にはないよ。ただ、もう少し落ち着いたら家に戻ってきて欲しい、とは思つてるかな？」

あつ、もーメンドクセ。

レッスの言葉に私が思つたのはこの一言だけ。その発言は旦那以外認めない。絶対にだ。

メンドーこの上ないからもうお前帰れ。

美形長身の考える事なんか心底どうでもいい（後書き）

お目を通して頂きありがとうございます。更新等お待ち下さっている方には大変心苦しい思いですが、12/21〜1/10の間は更新完全停止致します。PC起動自体難しくなる環境になると思われるので、奇跡的に書けたら更新します発言をしてやきもきされてしまう方もいらっしゃるかもしれませんがこの様なお知らせをさせていただきます。

皆様にとって健やかな年末年始になる事を願って。失礼いたします。

以下独り言

一応女性向きの物語のはずが女性向きにあるまじきサブタイ。だがこれしか思いつかなかった。別に恋愛・ハーレム系じゃないし、いつか！

レス回は一応これでお終い。しかし恋愛フラグが立っていると仮定して憶測すると、

レス↓イシーダ（気のない女性にボディタッチはしない＝恋愛フラグ）

LESS↓マナーブ （勇者の事話すと感情でたっばい!!アツ
ー!!フラグ）

……………果たしていったいどっちだ!?!??

まあどっちでもいいけどね、仮定の話しだし。

ついでに家の雑煮は鶏肉に茸大根等根菜類盛り沢山に長方形焼餅、
止めにあおさを揉み解して完了である。どうでもいい話である。
あー食いてー。

終わらぬ宵

物音のしない廊下に音をたてない様気を付け自室の扉を内側から閉め、私以外見あたらない部屋を確認してから、詰めていた息をやっと吐き出した。

……疲れた。その一言に尽きる。

「お疲れ様、いつしー」

下げていた視線を声の掛けられた正面の机辺りに移せばポットからカップに珈琲を注いでいるまーくん。疲れたと呟きながら私は珈琲の香りに誘われる様に椅子に座った。

座った椅子がまだほのかに温度を持っていて自然に眉間に皺が寄ったが構わず珈琲を飲んだ。口の中一杯に含んで、一気に喉を通らせる。凄い音が鳴ったが気にしない。

「さつきはちょっと危なかったけど、助かったね。一番常識があつて、それを実行する勇気のあるあの子に感謝」

案外勇者つてああいう子になるのかもしれないね、と言うまーくんの言葉に私は頷いた。

そう、最後に交した私の激昂しか煽らないレッスとの会話。「また今度、落ち着いた状況になった機会があれば善処してみます」と真っ向から返答を曖昧にぼかす私にレッスはハッキリとした確約を取り付けたい姿勢を崩さなかった。平行線しかない会話に心底嫌気がさしていた現状を打破してくれたのが、バイスだ。

「あの『もう夜中だぞ！　テメー、大人だからこそ未婚の女の部屋で長話しは非常識って解ってたろうな！』は痺れたね！　大人だって理由を逆手に取つたい文句だったね」

「うん、助かった。バイス様々だね。明日もう一度ちゃんとお礼言わないと」

二人で珈琲を飲みながらバイスを讃える。正直感情が爆発しそうだった。

今でも感情が波打っているからレッスの真意を探るなんて高等な事は出来そうもない。

「レッスの思惑はこつちで色々探ってみるよ。折角のパーティーメーンバーなんだからね」

「……ありがとう」

また二人でカップに口を付ける。レッスが去ってから、沈黙が落ちやすい。何とも言えない空気が置き土産など迷惑以外の何物でもない。もつと身になるものを置いて行って欲しいものだ、チョコとかお菓子とかチョコとか。

私の思いを読んだのかまーくんが内ポケからスツと取り出した物を机に置いた。

かさりと置かれた物はあつちでは見慣れた、一口チョコだった。

さすがまーくん！　君はエスパーです！！

「ただ漏れだからね？　ずっとただ漏れだからね？　考えてる事が！」

「切るうね？　レッスが居なくなったら直ぐに接続切るうね？

今は必要ないでしょうよ！」

少し不貞腐れて置いてあるチョコを次々に口に放り込む。うん、美味い。無言で聞きなれたお姉さんの声を待ってみるが一向に事後報告が伝わらない。

目だけでまーくに催促を促したら盲点を突かれた。

「ん？ ほら早く接続切りなよ、いつしー」

とてもいい笑顔ですね、まーくん。

「自分でやらないと経験にならないっしょ？」

それからまーくんのcall機能の实地訓練が開始した。まずは回線を切る、そして私からまーくに繋げる、切るを一通り覚えたら今度はその工程を迅速に行える様にひたすら練習。

最初は「やつべ初call嬉しすぎる！」なんて喜んでいたまーくんが今は少し虚ろな目をしてベッドに突っ伏している。正直、私もキツイ。頭の中で、明瞭に響くお姉さんの声が壊れたレコードみたいになっている。

ポーン『まーくにcallします』ポーン『接続します』ポーン『接続を終』ポーン『まーくにcall』ポーン『接z』ポーン『接続を終了s』

こんなのがエンドレスに頭に響き渡っているのだから私もまーくん同様虚ろな目になっても仕方ないと思う。直通短縮に設定したかと述べてみたら却下を申し渡された。あんまりだ。でも真つ当な

理由を述べられたら拒否出来るはずもないし、断るつもりもなかった。

迅速に、メニュー画面を展開出来るように。

迅速に、求めるコンテンツへスムーズに対応出来るように。

迅速に、ぶっちゃけとにかく慣れる。

最後はなんとも身も蓋もない言葉です。途中で考えるのが億劫になったのが前面に出てるよ、まーくん。でも無言でこの練習に付き合ってくれているまーくんに感謝。

「……もう良さそうだね。俺とあんまり遜色ないよ？ これなら直通短縮設定を強制接続専用に変更してみよう。その方が俺も安心できるし」

そんな設定があつたのか！！ 一体どこにあつたんだ？！

日中の時には気が付かなかつたので素直にまーくんに言われるままメニュー画面を展開し、高機能感漂うc a l l 設定を開いていく。いまだ複雑な心境になるのは仕方ない、土台がスーファミ画面なその中にP C 表示コンテンツがあるんだから、これは仕方ない。違和感バリバリです。

「はい、終了！ いっしょお疲れ」

「はあ？！ ちょっと！ 呆気な！！」

設定終了。しかも設定の仕方が直通短縮に設定してあるまーくん

のあの画像を長押し。それで終わり。……これでいいのか？

「そんなじゃいつしー、確認がてらもう一回メニュー画面出して。ん、どれどれ……」

画面を展開すると同時にまーくんが覗き込んでくる。その視線は間違いなく、私のメニュー画面に向けられて。

「ちよつ！ まーくん見えてるの?!」

「えっ？ 普通に見えてるよ?」

「なっ?! まーくんの画面見た事ないよ、私!」

「そりゃあ、出してないもん」

なん……だと……？

しばしまーくんの衝撃発言に呆然としてる私をまーくんは見事にスルーして「やっぱないか」と呟いた。メニュー画面に向けていたまーくんの顔が私に向く。その顔は真面目で、瞳は真剣だった。

視線をそらすことを許さない、そんな目だ。

その目で言われるであろう言葉がひどく恐ろしいもののような気がした。

「石田さん、俺のメニュー画面には『ログアウト』の標記があります」

まーくんから出たやけに丁寧な言葉に私は歓喜すればいいのか、

絶望すればいいのか、

どうすればいいのか

わからない

終わらぬ宵（後書き）

レッスの置き土産かテンションがいまいち上がらない二人。
二人がテンション低いと私もテンションが下がる謎。

少し期間を空けたらうまく文章がまとまらなくて今回はグダグダな進行になってしまいました。不甲斐ない執筆者ですが本年もよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5131y/>

おまいら助けてくれないか？ってスレ立ててみた

2012年1月11日14時12分発行